

在韓日本人の韓国文化の受容意識と 行動選択に関する一考察

—インタビュー調査から—

松樹亮子*

(e-mail : mtkrk@kyungnam.ac.kr)

<目次>

- | | |
|---------------|-----------------------------|
| 1. はじめに | 4. 考察 |
| 2. 先行研究及び研究目的 | 4.1. 異文化受容意識と行動が一致するケース |
| 3. 研究方法 | 4.2. 異文化受容意識と行動にズレが生じているケース |
| 3.1. 研究対象 | 4.3. まとめ |
| 3.2. 分析方法 | 5. 結論及び今後の課題 |

キーワード：異文化理解(cross-cultural understanding), 異文化適応(cross-cultural adaptation), インタビュー(interview), 韓国在住日本人(Japanese living in Korea)

1. はじめに

異なった文化を持つ人同士の交流の機会が増えていく社会環境においては、コミュニケーションのための言語の習得だけでなく、自身の文化と異なる文化との価値観や社会的な差についてもまた、学び、理解していくことが求められる。これは、韓国で生活する日本人にとっても例外ではない。彼らもまた、自身のバックグラウンドとは異なる文化の中で、生活を営んでいる。その中で、日本人と韓国人は互いの行動や言動に疑問を持つことも少なくないと思われる。任(2012)は、韓国人と日本人の間の日常レベルの些細な誤解が、知らぬ間に思わぬ偏見や誤解に繋がる可能性について指摘したが、頻繁に韓国人と接する機会がある日本人にとって、韓国人の行動に小さな疑問を持つことが、大きな偏見や嫌悪感

* 경남대학교 일어교육과, 조교수, 일본어학/일본어교육

につながる可能性も否定できない。本稿では、韓国に居住する日本人が、韓国で生活する中で韓国の文化をどのように受け入れ、どのような考えのもとに行動選択を行っているのかということに関してインタビューを通じた意識調査を行った。これを通して、韓国文化を日本人が受容していく際に生じる様々な意識と、そこから生じる行動選択はいかなる様相を呈するのかについて明らかにしたい。

2. 先行研究及び研究目的

異文化間コミュニケーションでは、しばしばコミュニケーション・スタイルの違いが引き金となってトラブルや摩擦が生じることがある。任(2012:63)は、「異文化間コミュニケーションにおける誤解の殆どは、相手のコミュニケーション・スタイルを、自文化のそれに当てはめて解釈してしまうところから生じる」と指摘している。また、特に日韓に関しては、地理的な近さに加え文化的な近さも重なり、「どこからが同質的でどこからが異質的かの線引きが難しい(曹・李 2006:2)」という指摘がある通り、類似性が高い分、より相手に対して自身の文化との境界を認識しにくい可能性があると思われる。

Bennet(1986)は異文化に接し自身の文化との違いを認識していく上で、人が自文化中心的な見方から文化相対的な見方へと認知が発達していく過程として、6段階の異文化感受性に対する発達モデル(A Developmental Model of Intercultural Sensitivity : DMIS)を提唱した。このモデルは、6つのステージ¹⁾で発達を捉え、前半の3段階は自文化中心的な見方に依拠したもの、後半3段階は文化相対的な見方が身についた段階であるとした。しかし、山本(1998)は日本人学生を対象とした意識調査によって、この発達段階の一部が日本人には必ずしも当てはまらず、部分的にしか支持できない点を指摘した。さらに、山本(2014)では、BennetによるDMISのそれぞれの段階において、日本人が文化差や類似性を認知し評価するときの捉え方について、より日本文化の文脈から読み解くことを目的としてアンケートによる量的な調査が行われた。異文化に対する認知の発達に関わるこれらの研究はいずれの場合も、必ずしも人々の異文化に対する意識が段階的に適応へと進むものではないことが指摘されている。

1) 違いの否定(Denial)、違いからの防衛(Defense)、違いの最小化(Minimization)、違いの容認(Acceptance)、違いの適応(Adaptation)、違いの統合(Integration)の6段階

異文化についての理解がどのような意識の変化をもたらすのかについては、様々な研究がなされてきた。大学教育での海外留学プログラムの実施からの学生の学びについて検証した前田(2017)は、現地の生活を通じて学びを実感する点として語学的な側面よりも自文化への理解と気づきや他文化への理解を挙げる者が多いことから、異文化適応能力の獲得や異文化・自文化への理解を深めることに多くの学びを得ている点を指摘している。また前田(2019)では、大学生の留学前と留学後の異文化観の変化について、留学先への滞在と出会いを通じて学生が多様性に触れることで、留学以前にテレビの情報などから作られた単純化された異文化イメージではなく、異文化に対して相対的で慎重な表現を使って語るようになったことを確認している。また、特に日韓の異文化理解に関して異文化交流プログラムを通じて意識調査を実施した藪田(2011)では、日韓の大学生間の意識の変化に関して、考え方の変化・感情への変化・行動への変化について報告している。このうち、行動の変化については比較的他の項目より低い結果となったといい、短期間の交流で行動に変化をもたらすことは難しいと考えられること、その文化圏での経験や価値観の違いに接し対処する段階の必要があること指摘している。これらより、短期間の交流であっても異文化に接することで意識に変化が見られることが分かるが、長期滞在となればまた異なった意識や行動の変化が起こることが予想される。

韓国人を対象に対日観の調査を行った研究である安(2019)、安(2010)、安(2008)では、対象者(交換留学生・長期滞在者・日本で1か月の研修を受けた韓国人)に対して自身が日本に抱くイメージとそれぞれのイメージ間での関連性などを対象者自身に解釈を求める方法を用い、それぞれの対日観がポジティブな解釈につながるのか、あるいはネガティブな解釈につながるのか、また滞在や経験によってどのような変化があったのかなどを明らかにしている。その中で、韓国人対象者が持つ対日観は、ある共通のイメージであっても個人によって評価が異なったり、またポジティブな側面とネガティブな側面を同時に認めていること、経験によって具現化することが指摘されている。加えて、長期滞在者の場合は日本の社会や文化より性格や考え方についてのイメージが多く現れていたことも報告されている。

また、在韓日本人の異文化意識に関する研究としては、韓国人と結婚した結婚移民女性の異文化に対する葛藤や生活実態、アイデンティティについての研究(김석란 2008, 이덕구 2009, 이시이ほか 2015)がある。結婚移民者を対象とした研究の場合、特に女性に限り調査が行われており、言語面での不自由さをはじめ、韓国の家族との関係性や誘いや遠慮、韓国人の“情”、あるいは消費生活や贈答文化、公共機関の利用、教育面などの様々な側面で葛藤が見られ否定的な意見を口にするケースが多く見られることが分か

る。特に、이시이ほか(2015)によれば、結婚移民者の場合は立場上、適応を拒絶できる環境にないことから韓国生活での困難点を克服するために自身を徹底的に同化させようとする努力が見られたり、日本人同士の集まりを利用して心理的な安心を求めるケースが見られたという。また、韓国に居住する日本人の韓国文化への適応度に関して研究した임영진・이화정(2013)では、異文化適応についてのアンケート調査を実施しているが、その結果、韓国在住日本人の韓国文化への適応度が非常に高いことを示唆している。

これまで日韓における異文化理解のための活動や研究は多く行われ、調査対象者たちは異文化に触れることで意識に変化が生まれることや、学びを得ていることが分かる。また、自身の経験をもとに異文化に対する認識を確立したり、さまざまな側面で心理的にストレスや葛藤を抱きながらも異文化に自身を同化させる努力をしたり、適応をしていっていることが分かる。しかし、韓国に在住する日本人がある異文化的な事象について、受け入れがたい場合はそれをどう理解・受容し行動に移しているのか、また、適応が進んだ場合にはどのような意識が働いているのかについてはまだあまり明らかにされていない。本稿は、異文化適応プロセスと言われるU曲線²⁾による適応度合いや異文化感受性の尺度の利用、あるいは量的な調査からは得づらい、異文化受容及び適応における複雑な意識とそこから反映される行動選択の様相について調査することが目的であり、日韓の文化差に関して日本人がどのように捉えているかの詳しい内省を知るために、現地に在住する日本人に対してインタビュー調査を実施することが望ましいと判断した。

3. 研究方法

本稿では、韓国在住日本人が滞在を通じて抱く異文化観が、その後の行動選択にどのように現れるのかということを確認するためにインタビュー調査を実施した。

3.1. 研究対象

インタビューを実施した対象者は以下の<表1>の通りである。今回の調査では、日本へ

2) ある文化に触れたとき、まずはその文化の真新しい食べ物や芸術などの「見える文化」に魅了される段階（ハネムーン・ステージ/蜜月期/初期適応など）があり、続いてだんだんに「見えない文化」的な違いが分かりカルチャー・ショックに触れる段階（カルチャー・ショック期/敵対・攻撃期/葛藤期など）、その後カルチャー・ショックを少しずつ抜け出し適応へと向かう時期が訪れ（適応開始期・回復期）、やがて異文化のほうが心地が良いと感じるまでの適応に向かうというモデルである。

の帰国をすでに決めている者については、帰国意思により異文化や自文化のとらえ方が揺らぎインタビュー内容に影響があることを考え除外することとした。そのため、当面は韓国で生活することを決めている者を対象にインタビューを行っている。インタビュー時間は、一人あたり20分～50分程度である。また、進学を目的に渡韓した留学生6名と、就職や結婚を機に渡韓した学生以外の者（以下、社会人対象者とする）5名にそれぞれインタビューを実施した。対象者は韓国で一定期間の生活経験があり、日常生活において韓国人との関わりが多くあることを確認している。大学院生の場合、大学卒業後にそのまま韓国の大学院への進学している者のみを対象とし、日韓両国において一切社会経験のない学生を対象として選定しており、結婚経験などもなく主なコミュニティが学校周辺であると推定される大学院生である。言語環境の異なりは適応に影響することが予想され、学校を中心とした環境であるのか、それ以外の環境であるのかという点から比較ができるようにこのような対象者の選定となった。また、社会人対象者の場合は、職業によっても異文化理解や適応に対する受け止め方が異なる可能性が考えられるが、今回の調査ではまず、学生と学生ではない者（社会人）という観点から分析を行うことにする。

<表1> インタビュー対象者の情報

No	対象者番号 ³⁾	年齢	性別	職業	在学期間 ⁴⁾	渡航動機	インタビュー時間
1	S-01	27	女	大学院生	4年2ヵ月	大学院への進学。大学では韓国語を専攻。もともと韓国への関心も高く韓国ドラマなどを見ていた。	19分
2	S-02	22	女	大学生	3年10ヵ月	大学進学を目標にして、はじめは語学留学で渡韓。中学生のころからK-POPに興味を持つようになったのが韓国語学習をはじめたきっかけ。	52分
3	S-03	23	男	大学生	3年5ヵ月	仲良くなった韓国人の友人が帰国するにあたって、韓国人の友達をもっと作りたいという思いから交換留学で渡韓。その後、大学編入。	42分
4	S-04	22	女	大学生	4年5ヵ月	高校卒業後、語学留学で渡韓。その後結果的に大学へ進学。	39分
5	S-05	22	女	大学生	2年7ヵ月 ⁵⁾	韓国が好きで、日本で独学で韓国語を勉強し、高校卒業を機に韓国で大学へ進学。	36分
6	S-06	25	女	大学院生	2年9ヵ月	日本で大学を卒業後、韓国の大学の大学院に進学。大学で韓国語の授業を受けたほかには、韓国語の勉強は独学。	28分
7	NS-01	41	女	ヨガ講師 / レストラン経営手伝い	4年9ヵ月	韓国人である夫のレストランオープンをきっかけに渡韓。	41分

8	NS-02	29	女	医療通訳（フリーランス）	2年	日本にある韓国系企業での勤務経験があり、韓国での就職のために渡韓した。そののちに、渡韓前から交際中だった韓国男性と結婚。	50分
9	NS-03	46	男	日本語学院 日本語教師	6年3カ月	日本では司会業をしていたが、その仕事を辞めもともと興味があった韓国に語学留学で渡韓。語学留学を終え、日本語教師として学院で日本語を教えている。	25分
10	NS-04	27	女	字幕翻訳家 / 通訳(フリーランス)	1年5カ月 ⁶⁾	大学生のときに、交換留学生として韓国での生活経験があり、大学卒業後は日本にある韓国系企業に就職。韓国男性と結婚したことをきっかけに韓国で生活するようになった。	38分
11	NS-05	42	女	翻訳家 (フリーランス)	6年	韓国での語学留学、大学院進学の実験があり、大学院卒業後に日本で韓国系企業に就職。ソウル支社への転勤のため渡韓するも、その会社を辞めフリーランスに。	39分

3.2. 分析方法

どのようなきっかけで異文化を理解し、それを受容したり適応したりしているのか。また、それがどのような行動選択へとつながるのか。インタビューでは全対象者に対して、(1) 韓国文化に対して自身が適応したと思うか、韓国人のように振る舞うようになったと思うことはあるか、(2) 韓国で生活するようになって日本に対して再発見したり再認識したりすることがあるか、という大きな2点について質問をし、エピソードを交えて自由に話してもらえよう半構造化インタビューを実施した。どういったきっかけによりそれに気がついたのかというエピソードについては、記憶している範囲でその時のシチュエーションとともに答えてもらった。また、それぞれについて、自身がそれをどのように捉えているのかも併せて聞き取りを行った。

インタビューによって集められたデータから、対象者それぞれがどのように異文化行動を受け入れているのかという点について言及する部分を抜き出して分析を行う。その際、対象者本人が最終的に異文化行動を自身が選択しているのかどうかという観点、またその行動選択に異文化理解が伴っているのか、あるいは意識的な行動なのか無意識の行動なのか

3) 対象者のうち、留学生は「S-数字」という形式で、社会人対象者は「NS-数字」という形式で表すことにする。

4) インタビュー実施時点での在韓歴である。

5) 2015年3月から滞在だが、17.9-18.8 休学、日本へ一時帰国。総滞在期間を記載。

6) 現在の在住期間は、1年5か月と他の対象者と比較して短期だが、交換留学で留学生活をした経験や、韓国系企業での就職経験を考慮し、対象者として問題がないと判断した。

という観点を併せて確認する。単に日本と韓国の差について述べている部分については分析の範囲外とした。

なお、本稿で「異文化行動」あるいは「韓国的な行動」「韓国の文化習慣」などと示しているのは、“韓国や日本で行われる文化や習慣”について正しい答えがあるわけではなく、あくまで対象者が“一般的に日本では行われない韓国特有の文化行動”と感じているものであることを断っておく（「日本人らしい行動」「日本的」といった内容についても同様である）。本稿では、何が韓国の文化的事象であるのか、あるいは日本の文化的事象であるのかということを具体的に規定することは目的としておらず、対象者の意識の中にある異文化・自文化（母文化）であることを前提に考察を進める。また、インタビューで聞いた内容は、対象者自身が韓国滞在を通じて意識や行動が変わったと思う主観的な内容である。そして、“適応”というのは、原沢(2014:60-61)が「適応期」での態度として示した、「異文化での生活に違和感を持つことはなくなり、現地の人とも適切なコミュニケーションをとることができるようになる。もはや異文化で不便を感じることはほとんどない。文化の違いを理解し、その違いを受け入れることができるようになる。」「異文化に慣れ、不自由なくその国で過ごすことができるようになること」という定義に従いたい。

4. 考察

本調査で対象者とした在韓日本人は、ある程度在住歴が中長期化しているため、韓国の習慣に十分に慣れ、自然に韓国の文化的行動を普段から選択して生活している姿が容易に想像できるかもしれない。しかし実際は、韓国在住の日本人にとって異文化である韓国文化の受容や適応にあたって複雑な心の葛藤があるということが分かった。

インタビューを通じ、対象者たち自身が韓国文化を受け入れる際の意識について、いくつかの共通点を見つけることができた。対象者たちは、ある異文化に接した際、それに対して自分なりに評価し、文化的立場を理解し、自身に取り入れるのかどうかを選択したり判断しているようであった。その際の反応は、ある異文化行動を理解、あるいは容認しているかという点と、その行動を自身が選択するかという点とが必ずしも一致していなかった。つまり、理解し受容していても異文化行動を選択するとは限らず、異文化行動を選択していても異文化的価値観を理解していたり、積極的あるいはポジティブに異文化を受け入れているとは限らないのである。このような意識面と行動面との不一致が、対象者の異文化生活での葛

藤を物語っている。

異文化受容に対する意識と行動について、インタビューから得られた内容を、それぞれ一致するケース、一致しない（ズレが生じている）ケースにまとめると以下のように整理することができる。

A. 意識と行動が一致するケース
(1) 韓国の文化や立場を分かりかねるため、抵抗感や拒否感を覚える。
(2) 韓国の文化や立場について十分理解するため、韓国では韓国での行動様式に従うのがいいと考える。
B. 意識と行動にズレが生じているケース
(1) 韓国の文化や立場を理解してはいるものの、自身の信念や価値観に合わないと考え、異文化的行動を行わない。
(2) 韓国の文化や立場について懐疑的、あるいは多少の抵抗感があっても、韓国の行動様式に合わせて異文化行動を行う。
(3) 韓国の文化や立場についての理解や意識は曖昧だが、とにかくまず異文化行動を自身に取り入れている。

意識と行動が一致するのは、大きく二つの場合があり、異文化を十分に理解できていない故に否定的な考えを持つものと、その逆で、十分な理解があるために文化圏に応じて対応しようとする姿勢の二つである。また、意識と行動にズレが見られるケースとしては、大きく3つが見られた。まず、異文化理解については十分にあるが敢えて異文化行動をとらないという場合、次に異文化に対して自身はあまりよい感情を持っていなくても行動面では異文化に合わせていくという場合、そして文化についての理解や意識は伴わなくとも異文化行動を選択してしまう場合であった。

以下では、この受容意識と異文化行動選択に関して、実際のインタビュー事例を踏まえ詳しく確認していきたい。

4.1. 異文化受容意識と行動が一致するケース

韓国文化への理解や受容、適応の側面から、異文化受容意識と行動が一致しているケースとして、まず、日韓の文化差があることは認識しつつも、十分に理解ができていないために、拒否感を抱いたり、受け入れる姿勢へと向かわないものがある（4.1.1.で考察）。また、もう一つのケースとして、前述の逆で、日韓の文化的差異について、十分な

理解があり異文化を受け入れ、適応が進んでいるためその文化に応じた適切と思われる対応をしようとするものである（4.1.2.で考察）。

4.1.1. 分からないものへの抵抗感 - 異文化の拒否

異文化、つまり韓国の行動様式について理解できないという心情を吐露する場合が見られた。異文化で生活するうえで、自身の母文化の習慣と違うということは気づきつつも、異文化行動を否定的に捉えたり、常に日本文化に対比させて（自文化中心主義的に）考える意識であり、異文化的価値観の理解に対して積極的な態度とはいえない。インタビューでは、韓国の行動様式について日本との違いを否定・批判、あるいは抵抗を覚えるといった発言がみられた。自文化を基準として異文化を見つめ、異文化の行動については理解ができない、異質なものであるためその行動のひとつひとつが気に入らず、異文化的な行動を否定するというパターンである。

ある行動について、日本ではマナーが悪いなどと評価される場合、「（日本ではそうではないために）イライラする」などの発言が見られ、主に日本との比較対象として韓国の行動を批判的に観察していることが見て取れる。このような感情面のいらつきから、「韓国の行動を自身の反面教師にしたい」であるとか、「韓国も日本のように（行動を）直したほうがいい」などといった回答が現れることが確認できた。韓国において、ある行動がなされる文化的価値や背景を理解する以前に、日本のほうが正しい、日本のほうがいいといった比較の視点から事柄をとらえ、評価し、異文化行動への理解を拒否してしまっている。以下の〈事例1〉では、NS-01が韓国の行動様式についてまだ受け入れる姿勢になれないことについて触れている部分で、異文化の習慣について好ましくないと捉えているため発言を控えるなど自身の行動を制限していることが分かる。また、〈事例2〉でS-04が言うルールとは日本の地下鉄でのマナーを指している。

〈事例1〉⁷⁾

私がまだ（韓国の文化習慣の）中に入らないから。なんかえっとだから、仲良く、だからさっき言った、仲良くなるためになんか友達にプレゼントいっぱいあげるとか、意見いっぱい言うとか、それをあたしがまだ受け入れてないから、そこにあたしが入らないと発言が言えないんだと思うんだよね、まだ。【NS-01】

7) 事例内の括弧書き内 () は、すべて筆者による内容の補填である。

〈事例2〉

地下鉄で、あの韓国人ルール守らないじゃないですか。あれはやっぱりいつ見ても、ちょっと直した方がいいんじゃないかなって思う。その気持ちを持ち続けようと思います。【S-04】

日本のマナーや暗黙のルールのようなものが基準になっているせいで、それに合わない韓国人の行動に対し苛つきを覚えたり、拒絶するような反応があることが分かる。こればかりではなく、韓国の文化を分かりかねるため行動を控えるであるとか、「腫物」に触れないように対応をするといった回答や、韓国という社会でどのように対処するのが好ましいかということが分からないと話す対象者もいた。また、自身がうかつな行動をとることによって、コミュニティを壊してしまうのではないか、関係性が悪くなるのではないか、といった心配から行動すること自体に抵抗を感じているような回答もあった。これらはいずれも、韓国人とできるだけ距離を置き自身の価値観や自文化の習慣を守る旨の意見であり、韓国文化へ理解を示そう、受け入れようという態度とは言えないだろう。同様の回答は、S-01、S-04、NS-01、NS-02、NS-03、NS-04から見られ、学生対象者に比べ社会人対象者からこの種の抵抗感や拒絶感についての言及が多かった。さらにNS-01からはこの旨の回答が多くみられ、自身でも5年居住してもこのような意識になかなか変化が見られないと話していた。

さらに、異文化の差異の否定には、もう一つのパターンが存在する。これは、批判的な見方ではなく、むしろ、違いは文化によるものではなく人の性格による、といったような形で文化の違いを認めようとする否定の仕方である。Bennet(1986)で“最小化”、山本(2014)で“曖昧化”という言葉で説明されてきたものと同じ概念のものと言える。文化の差異よりも人間の性格的なものが違いを生み出しているという考え方であり、結果的に文化的な差に対する理解が伴っていない。そのため、文化的な差異に目をつぶる形で異文化行動を行わない、という類のものである。今回のインタビューでこのような回答をしたのは、NS-05のみであったが、“(文化の違いというより)単に自身が年齢を重ねたから違うのかもしれない”、あるいは“人によって違うので文化の違いと言えないのかも知れない”という旨の回答をしており、文化差について慎重に判断しようとしている様子が見て取れた。異文化行動を拒否するような前述の否定と比べると、このような異文化差異の否定は、あくまで傾向としての文化の差であると認識し、断定を避ける形で異文化を尊重するような態度であると言える。

4.1.2. 異文化社会への適応 - 社会による使い分け/過剰適用

異文化行動を理解し、その価値観や文化的背景を認めたくえて、自身はその行動を積極的に取り入れている対象者は多くいた。滞在歴が長期になり、理解が伴うだけでなく、行動も韓国の様式に従って行うことに抵抗感がなくなるようである。また、異文化的な行動や事象について、その価値観を認め受容するだけにとどまらず、韓国の文化習慣や行動様式について、好意的な姿勢も見られる。

対象者の中には、自分が気を効かせたつもりでした行動がかえって韓国文化ではマイナスになるということを理解した体験や、自身がした行動を韓国人から「そうする必要はない」と指摘されたことで文化差を強く認識したという体験について話す者もいた。彼らは、これらの経験から、もともと日本でしていた行動を韓国では行わないという選択ができ、また、反対に日本に帰国した際には韓国での行動様式を持ち込まないで日本で好まれる行動を選択する、というように行動選択において文化によって使い分ける判断力が身につけている様子が見えられた。

<事例3>

どの国に住むかによっても評価が変わってくると思うので、日本にいるんだったら、たぶん言うこと言わないことを選べる？そういう力もたぶん必要で、で韓国だと、言わずにストレスたまるぐらいだったら、言って、ま、解決しなくてもいいから言うっていう力があつたほうがたぶん健康的に暮らせるだろうなって思うんで。<中略>韓国に来て、言わないと通じないって言うことを身をもって感じて、少しずつ言えるようになったのかなあ、と。【S-02】

<事例4>

(最初のうちは、誰かが) 常に物をくれたりとか、外食したときに全部会計されることに慣れて、「え、あたしどうしよう。これに対して何をお返ししたらいいんだろう」とかすごく悩んだんですけど。<中略> (いまは) 年下の子だったりとかその自分のために足を運んできてくれた人に対しては、おごるのは当然だなっていう風に思って、思うようになったので。この感覚を同じように日本でやっちゃうと、「え、なんでなんで」みたいに友達は思っちゃうから、あっそっかって。【NS-02】

また韓国で、友人間で行われる行動について好意的に評価し、日本でも通用するものだと、日本に帰った際にも実践したいと発言をする者もいた。<事例5>がその例で、S

-03が韓国の“情”文化について言及している部分である。

<事例5>

まあ1、2こ上でも習とかが、弟を気にかけてくれるみたいな感じ。〈中略〉そういう言っつてうれしいじゃないですか。日本人はあんまそういうのしないんで。で、いつも気にかけてるんだよ、みたいなところを学んで、それを、ま、日本でも使えるから、やろうかなっていう。【S-03】

自身の母文化だけでなく、異文化に触れたことによって行動選択の幅が広がり、それぞれの文化に合わせた行動選択が行えるようになる。また、韓国文化の価値を認め、周囲の人のために日本でもそうした行動を行いたいという韓国文化に対する尊敬の意が読み取れる。良いところは学び、自身の行動に活かしていこうとする姿勢であり、異国文化を体験したことにより自身の行動選択に判断力が育まれた結果といえるだろう。インタビューでは、S-02、S-03、S-04、NS-02、NS-04、NS-05から同様の回答が得られた。

しかし、異文化に適応していくことでこのような選択ができるようになる事例ばかりではなかった。韓国で好まれる行動でも日本ではその行動が必ずしも好まれないことがある。両者の文化が異なる以上、そういった違いが生まれてくるのは当然であるが、そのような行動を日本でもあえて行うという発言がみられた。これは、韓国の文化的価値観を自身の中に取り込み、適応が進んだからだと思われるが、その場合母文化である日本での文化価値に対しては目を背けることになってしまっている。

このように韓国文化に基づいた行動を日本でも過剰に適用する例については、韓国の文化習慣が自身の性格に合っているであるとか、そのほうが楽だからなどといった回答から見ると、個人の性向にも関係しているとみられる。以下の<事例6><事例7>は、日本でも韓国的な行動を過剰適用していると思われる回答である。

<事例6>

他は割と分かりながら（日本でも）やってるんです。例えば、寄せ箸とか、押したりとか、渡し箸とか、渡し箸ですか？〈中略〉（食事時の膝立て姿勢について）ほんとに日本的にはマナーすごく悪いと思うんですけど、足が疲れたらやりますね。そのが楽だから。

【NS-03】

<事例7>

小さい頃から、けっこう食事マナーについては、けっこうとやか・・・厳しく言われてたので、今でも言われます。でもなんか逃げ道ができたので。「韓国では、こうやって食べる」（と言う）。【S-04】

これらは、日本と韓国の文化的な差を理解したうえで、日本にいるか韓国にいるかという状況判断をしてその場その場で行動を変えたい、あるいは、両文化のいいところを学んで両方を今後の行動に生かしていきたい、といった旨の前出の事例とは異なり、自身がどこにいても自分が楽であるほう（異文化的行動）を選択するという旨の回答である。このような回答をした対象者は、日本で何が好まれ、何が好まれないか、あるいは韓国でのそれも理解していないわけではない。そのため意識的に上記のような選択をしているのであり、一方の文化で他方の文化的行動をすることは忌避される可能性も考えている。自文化中心的な見方からは脱しているが、文化相対的な視点を通りすぎ異文化中心的な見方へのシフトであるように見えた。異文化の受容態度としては、ポジティブに受容しているが、置かれている状況によって行動選択ができるようになるという異文化適応とは異なり、自身の都合のいいものを選択するという、文化間差異を結果的に無視した行動選択になってしまっている。このように異文化の習慣を過剰適用していることに対しては、S-04、S-05、S-06、NS-02、NS-03から回答があった。

4.2. 異文化受容意識と行動にズレが生じているケース

韓国文化に対する受容意識と自身の行動が一致せずズレが生じているケースとして、前述の通り3つのパターンが見られた。一つ目は韓国文化への理解が十分にあってでも敢えて異文化行動を行わない、あるいは行いたくないという場合（4.2.1で考察）、二つ目は韓国文化に対して意識の面ではあまり肯定的でないにも関わらず行動面では異文化に合わせている場合（4.2.2で考察）、三つ目は韓国文化についての理解は曖昧、あるいは特に気にしていない様子のまま、とにかく異文化行動を自身に取り入れてしまう場合（4.2.3で考察）である。

4.2.1. 異文化を理解しつつも自身に合わない判断 - 積極的非適応

文化の違いを理解を示した上で、自身は異文化的な行動をあえて選択しないという主旨の回答が見られた。これは、異文化的価値観を理解し、また容認しつつも、自身の行動

に反映させるには至らないという意識の表れであり、対象者が異文化における事象について自分とは合わないと判断しているようなケースである。

4.1.1.で言及した異文化行動の理解への批判的な態度の場合と異なるのは、違いについて文化的背景や価値を認めようとする態度が見られるという点である。差があることを認識しつつも、得体の知れないもの、背景の分からない行動である場合は、否定的反応につながるが、徐々にその行動が韓国の文化価値観では許容されるものであることを理解することになることで、容認する意識が生まれるようである。しかし、異文化の価値観を認めることと、自身がそれを実際に行うかどうかということの間には乖離がある。

韓国の文化的な価値観を容認しつつも自身の信念に合わないため、異文化的な行動を積極的に行わないという発言を以下のインタビュー事例から確認したい。〈事例8〉は、対象者が「ごめん・すみません」「ありがとう」といった感謝や謝罪の意を頻繁に口にするについて言及している部分である。これについて、韓国の人であれば同様の行動をとらないであろうと、韓国の行動様式について理解をしながらも、自身はその韓国式の対応はとらず、あくまで日本でよくそうするように「ごめん」や「ありがとう」をよく口にする、という旨の発言である。李(2012)の宮城県の大学生と韓国の大学生の感謝や謝罪表現の使用に関する調査によれば、日本人が韓国人に比べ相手の行為に対し「ありがとう」や「すみません」といった言語行動で表す傾向が強いと指摘されている。同様の差について、韓国在住の対象者たちは、やはり生活の中で感じているようで、感謝や謝罪について頻繁に口にするのを挙げて、「(この点において)やはり自身は日本人だと思う」という感想を話した対象者は他にも数名いた。このように、日本人らしい行動をあえて積極的に行うケースもあれば、韓国人は頻繁に感謝や謝罪の言葉を口にしないということを理解し、自身はどちらを選択したらいいのか、行動選択に混乱が見られるケースもあった。また、〈事例9〉も同様に、韓国に住んでいても韓国の文化的行動を選択せず、あえて日本的な行動を継続的にとり続けたいとした対象者の発言である。特にS-03は、共同使用するような場所で掃除を率先して行ったり、友人宅を訪問した際に靴をそろえたりといった行為について日本的であると評価し、自身はその“日本的”な行動をし続けている旨回答していた。

〈事例8〉

(自分は) ちっちゃいことでもなんかお礼を言う。お礼を言うとか、ごめんねって言うとか。〈中略〉たぶん韓国人だったら、このシチュエーションでごめんねとかありがとうとか言わないだろうなって。【NS-05】

＜事例9＞

もちろんゴミに始まり。あと電車のマナーとかもそうだし。ま、そういうのも全部理解はでき
るんですけど、自分はしようと思わないです。【S-03】

上記のような意識からいえるのは、異文化を理解するということが、必ずしも韓国文化を尊敬したり、その価値観を積極的に認め自身に取り入れようとする心の動きへと直結するものではないということだ。ある行動が、韓国では一般的である（あるいは一般的ではない）ことだと認識していても、自身の信念に沿わないため、また、“日本人として”その行動をしたくない等の発言が対象者から見られたのは、その表れである。山本(2014:82-83)では、日本人の差異の受け止め方に関して「できるだけ“不関与”でいることが好まれる可能性」を指摘し、また「相手との交流を保ちつつも違いを受け入れずに対処する“違いの無効化”のような対立を避ける処世術のような認知のあること」について指摘している。対象者たちは、異文化の持つ特徴や自身の考え方との違いは見ないようにして、自身がそこに関与しないことで処世術のように自身の考えや立場を守っている。

なお、このような回答をしている場合でも、対象者たちは異文化的な価値観や背景、立場については理解するという旨の発言をしており、自身は異文化的な行動を選択しなくてもそれに対して好意的な受け入れ態度を示す側面を持ち合わせている点は大変興味深い。このような、韓国の文化についての理解はあっても、自身の考えとは合わない、自身の考えと合わないために日本での習慣を維持し続けていくような内容については、S-01、S-02、S-03、S-04、S-05、NS-02、NS-05の回答から確認することができた。

4.2.2. 異文化に懐疑的であっても合わせて行動する - 消極的容認

自身の考えとは異なるが、トラブルを起こさないため、また余計な誤解を招かないために自身でも異文化行動を行うといったような、摩擦回避のための容認態度について言及する対象者がいた。また、自身が異文化行動を選択しつつも、内心どこか消極的であったり、異文化に対してマイナスな受け止め方が伴う発言が見られた。つまり、ポジティブな動機づけがないままに異文化行動が選択されていたり、ある事象について異文化の習慣がそうであると頭では分かっている、どこか違和感や抵抗感を抱いているという、意識と行動がちぐはぐになっていたり、どこか積極的に受け入れられなかったりするケースである。

まず、異文化の価値観を理解し認めた上で、トラブルを起こさないために我慢して関与を避けるであるとか、面倒を避けるために自分自身を押し殺すといった回答について確認して

みたい。つまり、自身が不利益を被らないように、また自分が嫌な気持ちにならないために、あるいは無駄な衝突を避けるために、自身を異文化に合わせるといった行動をしている自覚があり異文化行動を選択していても、意識の面では消極的な態度を見せている例である。

<事例10>

私、けっこうその現地の人に混ざろうっていうのがけっこうあって、あまり目立ちたくないっていう。<中略>結局私もすごい人の目気にするので、そういう面では、私も日本人だなんて思います。<中略>例えばその、現地の人に混ざりたいとか、目立ちたくないって思うのも一周りの人の目が気になるからですかね。【S-06】

<事例11>

先にどうぞ、とか待ってるのにあとから来た人が先に入るとか、なんかそういうのがすごいちょっと一個一個イライラするよね。でも最近は、もうはじめから「どうぞ」って言う。疲れるから。【NS-01】

<事例12>

なんか、やっぱりこう、日本に比べて自分が言わないと自分が損するだけだっていうことが多いっていうことがあって、まあお店とかでもそうなんですけど。<中略>不必要にこう、笑わなくはなりませんでしたよね。人と接するときに、特に、お店とかで店員さんと話するとき、なんかこっちが下手に出たら、すごいマウントとられることが多い気かして。【NS-05】

相手の立場は理解し、韓国で何が好まれるか分かっているが、それに対してどこか否定的な見方がある。しかし、摩擦や誤解を生むくらいなら目立たずに異文化行動を選択したほうがよい、また、自分が損をするくらいなら異文化行動を選択するという立場は、異文化をポジティブに受け入れ自身に取り入れている状態とは言い難いだろう。なぜなら、異文化行動を行う動機づけが、「目立ちたくない」や「疲れたくない」といった自身に起こり得るマイナスの効果を回避しようとする発想によるものであるからである。<事例10>からは、S-06自身が目立ってもいいことがないと捉えていることが分かるが、事実インタビュー後にその旨の発言をしていた。また、「我慢する」という発言や「下手にでたらマウントを取られる」と言った発言から、自分が異文化的な行動を選択することを「仕方なく」受け入れているという意識が垣間見える。韓国との違いを理解し、結果的に異文化行動は選択してい

でも、内心では快く思っていない側面があることが分かる。

また、以下の〈事例13〉は、S-02が日本にいたときは異なる行動選択をしなければならないことを認識し、ストレスを感じながらも、摩擦や誤解を招くということに気が付き、自身の行動を制限していることに言及する例である。

〈事例13〉

日本にいたときみたいなアクションができなくなったのはやっぱりちょっと、大きいというかストレスだったなっていうのはありますね。〈中略〉(そのときは)基準が日本になってて、そこを譲らないからたぶん、こう、生まれた摩擦というか、疲れたと思うので。〈中略〉(今は)意識してそういうことないようにしてます。誤解を、これは誤解を招くんだなっていうふうインプットして、これはしないようにしよう(としている)。【S-02】

このように、自身の行動を制限することで自身がマイナス感情を持たないよう、また、相手との摩擦を起こさないよう努力している姿は、いずれも意識と行動がどこか一致せず、韓国文化に対してどこかで違和感を抱きつつも容認するような態度に関する回答であると言える。このような回答は対象者から多くみられ、S-01、S-02、S-03、S-06、NS-01、NS-02、NS-03、NS-04、NS-05が言及していた。

4.2.3. 曖昧な異文化理解と異文化行動選択 - 境界の混乱・模倣

異文化的価値観を深く理解するという段階を経ずに、単純に韓国人の行動を真似ることにより異文化行動を選択している場合がある。このような場合は、まず行動に移してみるという模倣から異文化行動を選択していると言える。中には、母文化である日本の文化との境界が曖昧になり、ある事象についてどちらの文化で好まれるものなのか、はたまた両文化にそもそも存在していたものなのか、文化差の境界線が分からなくなる、という主旨の発言をする対象者もいた。〈事例14〉は、S-04が公共交通機関での通話に関して自身の無意識の行動に自ら気が付いたことについて回答したものである。また、〈事例15〉は、日本語教師であるNS-03が、日韓の言語行動の差異が曖昧になってきてしまっている事例である。

〈事例14〉

韓国って地下鉄の中で電話とかOKじゃないですか。バスでも。で、日本に帰ったときに、あたしバスの中で普通にお母さんと電話しちゃって。なんにも気にせずに。お母さんになんか聞きたい事があってお母さんに「もしもし」って話してて、で急になんか「ん」って思っ

「でもお母さん、日本でさ、バスの中で電話してもいいんだっけ」って聞いたら、「え、だめだよー」みたいな「あ、バスの中いるの？」って言われて、「うん、バスの中」って言ったら、「じゃあ切るね」って言われて切ったことがあって。〈中略〉最初なんの考えもなく、韓国で感覚で普通に電話しようって電話してて、急に日本の感覚が戻ってきて。【S-04】

〈事例15〉

例えばあの、金曜日の授業が終わると、なんですか、「즐거운 주말 보내세요」とかって言うんですか？〈中略〉韓国では当たり前を使うので、私も使いますが、「先生、これ日本でも使いますか？」って聞かれると答えられないんです、はっきり。つかうかなあ？ありますね。あいさつですか？〈中略〉だからそういうのがね、分からないんですよ。

【NS-03】

対象者らは、無意識で自身が行っていた異文化行動に対して自己反省をする発言も見られる。この自己反省のような発言が見られるのは、いずれも日本へ一時帰国した際に、異文化行動を日本人の友人や家族の前でとってしまった場合であった。誰かに行動について指摘されたり「日本では一般的ではない行動だった」と自らが付いたりしており、自身の中に日韓の文化差に関する意識が薄れていたことに対する反省であった。つまり、国や文化によって好まれる行動があるということを、無意識で行った自身の行動によって気づき、内省し、異文化行動に対しての理解を深めることにもつながっているといえる。

また、気が付かないうちに異文化に適応してしまっていて、韓国で一般的に行われる行動を自然に選択していたという発言は、対象者から複数見られた。他者から指摘される形で文化行動に意識が向いてくるというようなケースとして、韓国人から、「한국인 다 됐네 (韓国人になったね＝韓国人のように行動や言動が自然であるということ)」などと言われた際に、自身でもその言動がなぜそのような評価を受けたのか理解できていないことから文化差に目が向いたり、どうして韓国人のようなのかを友人に聞くと答えた対象者もいた。下記の〈事例16〉は、電話口に出た対象者が最初に発した言葉について、韓国人の友人に「韓国人のようだ」という感想を言われたが、なぜそう言われたのか自文化と異文化との言語的な差異について理解しかねている事例の一つである。

〈事例16〉

(友達に「한국인이네」などと言われて) よくわかんなかったんですけど。日本語でも言わな

いのかなあ、そしたら。まあ、言わないか。急に電話かけて、普通やっぱ、あのさ、もしもぐら
いかなあ (と思った) 。【S-01】

特に無意識で異文化的行動を行い、両文化の境界が曖昧になるケースとして目立ったものとして、言語面において目標言語が第一言語に影響を及ぼす言語の逆行転移のような現象が起こっている点があげられる。韓国語の直訳のような日本語を使うなど、日本語としては不自然な言い回しをしてしまっている場合、家族から言われて気が付くといった発言のほか、言ってから気がつく、書いてから気がつくなどと回答した対象者もあり、無意識で使用した後に自ら気がつくというケースも多くあるようだ。このような言語使用について対象者たちは、一様に母語である日本語の使い方が不自然になってしまっている点に言及し、それを反省していた。特に、社会人の対象者に関しては、日韓の言語を仕事とした者が多く、普段からことばの使い方について気を使っているという発言が見られ、逆行転移のような現象が起こらないように細心の注意を払うようにしているとの回答もあった。仕事と直結しているため、学生対象者に比べ特に気をかけている点であると推測されるが、彼らにとっても少なからず逆行転移が起こることがあるために注意をしていることなのであろう。

以下の〈事例17〉は、韓国で体調不良の場合、日本語の「痛い」に訳される「아프다」をそれのみで使用することがあり、日本語でそれをそのまま使用することは文章として不自然であり韓国人日本語学習者にもよく見られる誤用であるが、それを日本人である対象者が使用していると回答した例である。S-01は、自身が日本語母語話者であるにも関わらず、このような日本語使用をしていることに対し、韓国人日本語学習者の友人の誤用を多く聞いてきたことによる影響ではないかと本人が考察していた。

〈事例 17〉

体調が悪かって言わなきゃいけないのに、日本語で、韓国語の影響で、なんか最近、最近痛くてとか言ってしまう自分がある。〈中略〉気づいています。わたしも。あ、変だなと思うんだけど、なんかその体調が悪くより痛みが先に出てしまう。【S-01】

このように言語行動面を含め、両文化の境界が曖昧になり混乱を起こしていることについては、対象者全員からインタビュー中に言及があった。

また、対象者NS-04は、日本語で話す場合も韓国語を織り混ぜて話すことがあると回答し、その際韓国人と同じような自然な韓国語の言い回しをすることで韓国人の情緒や感

情などを理解できるようになるという発言をしていた。韓国人がするような言動を模倣していくことで文化を理解し、適応していくことにもつながっていくと考えているようである。もともと生活基盤があった日本から韓国へと移り住むことで、異文化社会での生活習慣や社会文化へ身を投じていくために言語行動においても進んで模倣する姿であると思われる。

さらに、文化的な差があること自体は気が付いているが、拒否感や違和感を伴った反応にはならず、「韓国ではそういうものか」と深く意識せずに模倣行動に移るケースもある。以下の〈事例18〉は、特に文化の違いについて深く考えることなく行動に取り入れたというケースである。

〈事例18〉

あんま割り勘しなくなった。(それは自分の中の考え方が変わったからですか？それとも周りがそうしてるから？という質問に対し) んー、なんか、周り。年下で入ったときは、絶対上の人が買ってくれてたから、あ、そうす、そういう文化なんだ(と思った)。で、年上になったときに、買ってあげるようになった。【S-05】

韓国人の行動や言動を模倣することがすなわち韓国文化を深く理解しているということにはならない。しかし、積極的な模倣によって、異文化での行動様式を知ることで、結果的に異文化を積極的に受け入れ理解が深まることはあると考えられる。このように深い理解が伴わずとも積極的に模倣をするという旨の回答は、S-02、S-04、S-05、NS-04から確認することができた。

しかし逆に、模倣によって自身の信念や性格に合わないものであるということ改めて確認することもあるだろう。模倣して異文化に合わせることをストレスに感じたり、“素でいられなくなった”などと話した対象者がいたが、積極的に模倣した結果、韓国の文化を肯定的に受容できなかった場合には4.2.1.で確認した自身の信念と合わないため異文化行動を選択しなくなる(積極的な非適応)や、4.2.2.で確認した異文化を認めつつもどこかマイナスな意識を持つこと(消極的容認)へとつながるという可能性が考えられる。

4.3. まとめ

インタビューを通じて、対象者からは自身の行動の中にもともと持っている日本の文化ではない韓国の行動様式を取り入れていることや、それがかえって楽になった、文化に合わせて行動を選択している、などの回答が見られ、一定の滞在期間を経ている日本人にとって韓国文

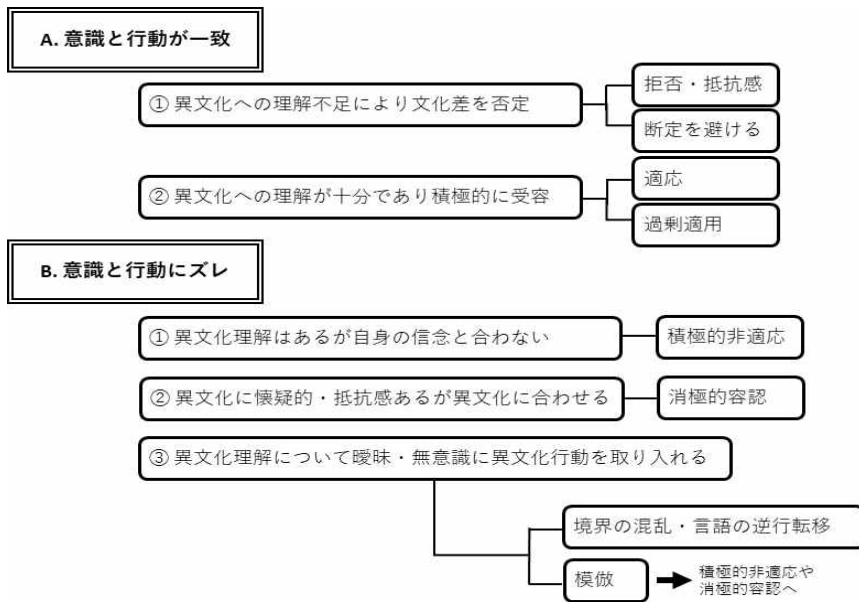
化を自身に取り入れた生活がある程度可能になってきているということが分かった。これらは、韓国の文化を積極的に受容した上で、異文化行動を選択するような場合であり、文化受容に対しても異文化行動選択についても肯定的な態度である。しかし、その後の対応として、日韓のそれぞれの文化において適切であると思われる行動を選択できる場合と、韓国で好まれる行動を日本でもあえて意識的に行い過剰に異文化の習慣を適用させてしまう場合とがあるということが確認できた。また、どうしても自文化中心的な視点から抜けきらず、韓国文化的な事象に対して抵抗感や拒否感を抱いてしまうという回答も見られた。これは文化受容に関して否定的である故、自身も異文化行動を選択するという結論には至らないものだ。

一方でこれとは別に、異文化理解があっても適応をあえて選択しないケースや、異文化行動自体は取り入れているように見えても、意識の面ではマイナスな評価をしていたり、その行動選択が否定的な動機づけがされていたりするケース、また異文化理解が曖昧であったり、無意識のまま異文化行動が選択されたりするケース、と様々なケースが存在し、異文化に対する対象者の意識と行動は必ずしも一致していないことを確認することができた（<図1>）。そして、このような意識と行動にズレがある場合のほうが、意識と行動が一致する場合よりも対象者から多くの回答が得られた。対象者別に言及があったかどうかの内訳を<表2>にまとめた。

全体を通して対象者から一番多くの言及があったのは、曖昧な文化理解により両文化の境界が分からなくなったり無意識に異文化的な行動をとってしまったことであり、日韓それぞれの文化に対する認識に混乱が起こっていることが分かった。対象者たちは、韓国生活が中長期化する中で、ある行動や言動がどちらの文化に則した行動であるのかが曖昧になるという経験をしているということが分かる。次に言及が多かったのは、消極的容認に関する回答であった。つまり、どこかマイナスな感情やネガティブな意識、異文化に対する懐疑的な意識を持ちつつも韓国の文化を理解しそれに合わせて行動をとるという項目である。山本(2014)は、異文化との差異を認識する際の認知として、積極的な受容ではなくとも心を広げて自分の許容範囲内に収められるようにする日本人の「譲歩」の態度について指摘しているが、同様の意識であると考えられる。このような回答から、対象者の多くが自身の中で自然には受け入れにくいものに折り合いをつけようとする意識が強く働いているということが確認できた。

次に、学生と社会人で多少回答に差が見られた点について確認してみたい。まず、異文化を否定したり拒否感を覚えるような場合や曖昧なものへの断定を避ける場合（図中のA-①）では、社会人対象者全員がその旨の回答をしているのに対し、学生からは2名のみの言及であった。さらに、深い異文化理解なく模倣をすることで異文化に馴染んでいった

旨の回答（図中のB-③内「模倣」）は、社会人対象者からは言及が少なく学生対象者に多く見られた。これらより、社会人は学生に比べ韓国文化に対する抵抗感や拒否感を抱きやすく、曖昧なものを受け入れにくい傾向にあることが分かる。また、積極的非適応（B-①）については逆に、学生対象者5名から回答があり、社会人対象者は2名からの回答にとどまった。この点から、学生対象者は、文化への理解が曖昧であっても行動を積極的に取り入れ、また自身の信念と韓国の文化的価値観が一致しないと判断した場合は、あえて適応をしないことを選択する傾向にあることが推測される。そして、消極的容認（B-②）という異文化に多少懐疑的であってもそれに合わせた行動をとる点については、社会人対象者では全員から言及があるのに対し、学生対象者は6名中4名からの言及にとどまることから、社会人は前出の「讓歩」の姿勢が学生より強く、学生はより自身の信念に従い行動選択を行っている可能性が考えられる。しかし、これはあくまで傾向であり一般化することはできない。これらに関する検証については、データを増やすなどして今後さらなる分析が必要である。



<図1> 対象者の意識と行動選択

<表2> 意識と行動選択に関する対象者による言及の内訳

A. 意識と行動が一致	インタビュー中の言及	
	学生	社会人
① 拒否・抵抗感 (6名)	S-01, S-04	NS-01, NS-02, NS-03, NS-04
断定を避ける (1名)	-	NS-05
② 適応 (6名)	S-02, S-03, S-04	NS-02, NS-04, NS-05
過剰適用 (5名)	S-04, S-05, S-06	NS-02, NS-03

B. 意識と行動にズレがある	インタビュー中の言及	
	学生	社会人
① 積極的非適応 (7名)	S-01, S-02, S-03, S-04, S-05	NS-02, NS-05
② 消極的容認 (9名)	S-01, S-02, S-03, S-06	NS-01, NS-02, NS-03, NS-04, NS-05
③ 境界の混乱・ 言語の逆行転移 (11名)	S-01, S-02, S-03, S-04, S-05, S-06	NS-01, NS-02, NS-03, NS-04, NS-05
模倣 (4名)	S-02, S-04, S-05	NS-04

5. 結論及び今後の課題

今回の調査では、韓国に在住する日本人にインタビューによる意識調査を行うことで、日本人が韓国文化を受容し適応していく際の認識とそれに伴う行動選択の様相がどのようなかを確認することを大きな目標とした。日本人が韓国文化に適応するということは、韓国の文化的な行動や事象が、自身にとって窮屈であったり、不快なものとしてではなく、それを行うこと（あるいは日本的な行動を行わないという選択）が異文化における生活に不自由をきたさない状態であると言える。

インタビューの事例から分かったこととして、異文化受容意識とその後の対象者の行動が選択が一致している場合とズレが生じている場合があることがある。そして、意識と行動にズレがある場合のほうが、一致している場合よりも対象者の回答に多く見られた。特に、今回の調査では、異文化理解が曖昧であったり無意識の行動であっても言動面に異文化行動を取り入れているといった意見が全対象者の回答から見られ、日韓それぞれの文化の境界線が曖昧になり、自身の行動に混乱を感じる経験があることが分かった点が特徴的であった。また、韓国文化に対して懐疑的であったり、どこか消極的な捉え方があったとしても、韓国で生活する以上は韓国の文化に合わせて行動する消極的な容認態度や、韓国文化を容認しつつも自身の信念と合わないためあえて異文化的行動を選択しないといった積

極的非適応についても多くの言及があった。

また、学業を目的に渡韓した留学生と、社会経験や婚姻のために渡韓した社会人とで、インタビューの回答に多少の差があることが確認できた。まず、学校コミュニティを中心に生活する留学生対象者は、異文化に対する理解が曖昧であったり、よくわからないことに対して拒否感や抵抗感が少ないようであるということが指摘できる。それに比べ、社会人対象者の場合、わからないものに対する抵抗感から距離を置こうとしたり、拒否感を根強く持っているケースが比較的が多い傾向があることが推測された。文化への理解が不十分なままでも異文化行動を模倣するケースは留学生のインタビューでの回答のほうが多く見られたが、これも社会人対象者に比べると未知なものへの抵抗感の少なさゆえと考えられるのではないだろうか。また、自身の信念と合わないものに対して敢えて適応しないという回答も社会人対象者に比べて学生対象者に多かったが、逆に社会人対象者の場合、多少違和感を覚えつつも、異文化を理解し自身に折り合いをつけて韓国の習慣に従うことで、自身を異文化側に合わせていく姿勢に関する回答が学生対象者より多く観察された。ただし、今回は、インタビューで得られた回答のみをもとに考察を加えたため、対象者の属性（学生であるのか、そうでないか）による異なりについては、あくまで傾向として見られた程度にとどまる。また、社会人対象者に関しては、その仕事の内容（日本関連の職種であるのかそうでないのか等）によっても適応に差が現れる可能性が考えられる。そのため、さまざまな属性ごとに対象者を増やし量的な調査を実施するなどしてさらなる検証が必要となる部分である。

加えて、対象者は食事に関することや、公共機関での振る舞い、交友関係に関することなどさまざまなトピックについて回答をしていた。それぞれのトピックにおいて、多様な反応を見せており、この点については今後継続的に研究をしていきたい。

異文化に身を置く際、自身がそれまで維持してきた習慣との摩擦や心情の葛藤は避けて通れないことであろう。個人が何気なく行っている行動も、実は文化的背景があるものであり、それを知ることは摩擦や偏見、嫌悪感を和らげるうえで助けになるのではないだろうか。日韓の関係悪化が取りざたされる昨今、余計な否定感情を引き起こさないためにも、文化の違いに対し互いに目を向けていくことは重要であると思われる。

【参考文献】

- 김석란(2008) 「한일국제결혼을 통해 본 문화적 갈등에 관한 연구」 『日語日文学』, 第37輯, 한국언어일문학회, pp.287-299. (DOI: 10.18631/jalali.2008..37.019)
- 이덕구(2009) 「일본여성결혼이민자의 한국사회 적응실태 - 충남의 농촌지역(홍성, 예산, 청양)을 대상으로-」 『문화관광연구』 제11권 제2호, 한국문화관광학, pp.23-36.
- 이시이히로코, 민기연, 선곡유화, 이영선(2015) 「한 일 국제결혼한 장기거주 재한 일본여성의 문화정체성 탐색」 『다문화사회연구』 제8권 제2호, 숙명여자대학교 아시아여성연구원, pp.107-143. (DOI: 10.15685/jms.2015.08.8.2.107)
- 임영진, 이화정(2013) 「한국거주 일본인의 문화적응 모형과 다문화적 수용태도 연구」 『평화학연구』 제14권 4호, 전남대학교 세계한상문화연구원, pp.187-205. (DOI: 10.14363/kaps.2013.14.4.187)
- 安龍洙(2008) 「韓國人の対日観に関する一考察 : 個人別態度構造分析法(PAC分析法)を用いて」 『유라시아연구』 제5권 제3호(통권 제11호), 아시아유럽미래학회, pp.107-125. (DOI: 10.31203/aepa.2008.5.3.006)
- (2010) 「外国人の対日観に関する研究: 日本滞在歴の長い韓国人の場合」 『유라시아연구』 제7권 제4호(통권 제19호), 아시아유럽미래학회, pp.373-392. (DOI: 10.31203/aepa.2010.7.4.017)
- (2019) 「日本社会における韓国出身交換留学生の異文化理解に関する一考察」 『茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究』 No2, 茨城大学全学教育機構, pp.1-11.
- 李在濬(2012) 「人間関係による意識と言語・非言語行動の違い-日韓大学生の感謝と挨拶程度の場面对する行動を中心に-」 『言語科学論集』 第16号、東北大学、 pp.1-12.
- 石井敏他(2001) 『異文化コミュニケーションの理論—新しいパラダイムを求めて』、有斐閣ブックス.
- (2013) 『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション: 多文化共生と平和構築に向けて』 有斐閣ブックス.
- 任榮哲·井出里咲子(2004) 『箸とチョッカラク 言葉と文化の日韓比較』、大修館書店.
- 任榮哲(2012) 「コミュニケーション・スタイルの違いと異文化摩擦」、한국일본어학회 학술발표대회, pp.59-64.
- 殷夢茜·青木紀久代(2018) 「在日中国人留學生の異文化適応に関する質的研究」 『お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要』 19, お茶の水女子大学心理臨床相談センター, pp.49-59.
- 葛文綺(1999) 「留學生の異文化適応に関する研究: 来日目的, 対日イメージと適応度との関連を中心に」 『名古屋大学教育学部紀要』 46, 名古屋大学教育学部, pp.287-297. (DOI: <http://doi.org/10.18999/bulsep.46.287>)
- 河内智子(2014) 「変化・転機についての振り返りを通じた異文化適応教育の試み: 異文化適応のW型曲線モデルと変化に対処するための4Sモデルを用いて」 『国際経営論集』 48, 神奈川大学, pp.71-83.
- 久米昭元·長谷川典子(2007) 『ケースで学ぶ異文化コミュニケーション—誤解・失敗・すれ違い』、有斐閣選書.
- 孔美熙·孫東周(2014) 「異文化コミュニケーション能力育成のための考察-在韓国日本人のアンケート調査より-」 『日語日文学』 第64輯, 대한언어일문학회, pp.5-20. (DOI: 10.18631/jalali.2014.64.001)
- 田中共子·中島美奈子(2006) 「ソーシャルスキル学習を取り入れた異文化間教育の試み」 『異文化間

- 教育』24、異文化間教育学会、pp.92-102.
- 曹美庚·李建(2006)「消費行動の比較と異文化理解 -日本と韓国の大学生を中心に-」『京都学園大学経営学部論集』第16巻、京都学園大学経営学部学会、pp.1-26.
- 原沢伊都夫(2014)『多文化共生のための異文化コミュニケーション』、明石書店.
- 前田ひとみ(2017)「個人別態度構造分析による日本人学生の海外留学における学び」『目白大学高等教育研究』第23号、目白大学教育研究所、pp.1-10.
- _____ (2019)「異文化理解教育における新たな試み—個人別態度構造分析による日本人学生の留学前後における異文化観の変容—」『目白大学高等教育研究』第25号、目白大学教育研究所、pp.1-9.
- 籾田由己子(2011)「異文化交流プログラムにおける意識調査--韓国と日本の大学生のケーススタディーを通して」『清泉女学院短期大学研究紀要』第29号、清泉女学院短期大学、pp.47-61.
- 山本志都(1998)「異文化センシティブティ・モデルを日本人に適用するにあたって-再定義の必要性について-」『異文化コミュニケーション』2号、異文化コミュニケーション学会、pp.77-100.
- _____ (2014)「文化的差異の経験の認知 : 異文化感受性発達モデルに基づく日本的観点からの記述」『多文化関係学』11、多文化関係学会、pp.67-86. (DOI: https://doi.org/10.20657/jsmrejournal.11.0_67)
- Milton J. Bennett(1986) A developmental approach to training for intercultural sensitivity. *International Journal of Intercultural Relations*, 10, pp.179-196. (DOI: [http://doi.org/10.1016/0147-1767\(86\)90005-2](http://doi.org/10.1016/0147-1767(86)90005-2))

논문 투고 일자 : 2020. 02. 29.
논문 심사 일자 : 2020. 04. 24.
게재 확정 일자 : 2020. 04. 24.

< 要旨 >

在韓日本人の韓国文化の受容意識と行動選択に関する一考察
-インタビュー調査から-

松樹亮子

本稿は、韓国に居住する日本人が韓国文化を受容し適応していく際に、どのような意識を持ち行動しているのかということ調べるためにインタビュー調査を行った。その結果、対象者たちから自身が韓国の行動様式を取り入れて生活している旨の回答や、受容できず否定的な観点を持ち続けている旨の回答を確認することができた。また、韓国文化への理解は示しつつも適応をあえて選択しないケースや、異文化行動は選択するものの意識の面ではマイナスな評価をしていたり、その行動選択が否定的な動機づけによるものであったりするケース、文化理解は曖昧であっても行動に移してしまうケースなど、意識と行動選択にズレが生じているケースが存在することが分かった。そして今回の調査では、意識と行動が一致するケースより、意識と行動選択にズレがあるケースのほうに多くの回答が見られた。

さらに、留学生と社会人ではインタビューで回答した内容に関して多少傾向の違いがあった。特に、社会人のほうが理解が曖昧な異文化事象に対する抵抗感が大きいことが読み取れた。逆に留学生は、理解が曖昧なままでも異文化行動を単純に模倣する等の言及が社会人より多くみられることから、異質なものへの抵抗感が少ないと推測できる。また、留学生対象者は自身の信念に合わない異文化行動に対しては適応をしないことを積極的に選択している傾向があるのに対し、社会人対象者は意識面では多少マイナスに受け止めていても異文化行動を選択する消極的容認の姿勢を見せる傾向があると考えられる。

Cultural Awareness and Behavioral Choices for Japanese Residents in Korea:
A Qualitative Study

Ryoko, MATSUKI

In this study, we conducted interviews to determine what kind of consciousness Japanese people living in Korea have toward accepting and adapting to Korean culture. Through the interviews, we confirmed that the subjects are adapting the Korean culture and that they continue to have a negative attitude that they cannot accept aspects of Korean culture. In addition, we found that the subjects had a gap between consciousness and choice of action. The cases may differ in terms of whether the subjects do not choose to adapt to Korean culture even if they understand it, choose to adapt to a different culture even if they are negatively motivated, or first adapt even if they do not understand Korean culture. In this survey, subjects gave more answers in cases where there was a gap between consciousness and behavior selection than in those where consciousness and behavior matched.

Furthermore, there was a slight difference in the content of the interview responses between students and working adults. In particular, it was found that working adults have a greater resistance to cross-cultural events, which is still not completely understood. On the other hand, more students than working adults answered that they copy the behavior of different cultures even when their understanding is vague, which suggests that they have less resistance to different events. In addition, while students tend to actively choose not to adapt to cross-cultural behavior that does not conform to their beliefs, working adults tend to select such behavior even if they take it slightly negatively.